

# 親子の「主体性」を育む「地域子育て支援センター」 におけるスタッフの援助実践

—他者性の変化の過程における「居場所」の機能—

The Practice of Rearing the Subjectivity of Parents and Children at the  
Child Rearing Support Center

—the Function of the “Intimate Sphere” on the Process of Changing Others—

松永 愛子  
(Aiko MATSUNAGA)

## Abstract :

In this study, I show features of relationships among parents at the Child Rearing Support Center (CRSC) through participation observations for 5years. In addition, I show the practice that staff members supported the mother with difficulties of child rearing, through the analysis documents written by them for three years.

As a result, Firstly, it was suggested that “acceptable norm” of them would make the free space of the CRSC the Intimate Sphere for parents. Secondly, It was suggested that “Intimate Sphere” would make the “Other” for the mother more intimate. I also pointed out the “Other” brought up the subjectivity of her and possibility to change parenthood affirmatively.

キーワード：子育て広場、居場所、主体性、他者性

Keywords : Child Rearing Support Center, Intimate Sphere, Subjectivity, Others

## I. 本論文の目的と方法

### 1. 目的

近年、「子育て不安」を抱える親の増加に伴い、様々な子育て支援事業が行われている。子育てに追われる親は物理的・精神的に主体的行動が難しい状況におかれている場合が多い。例えば、子育てに悩み相談機関に行きたいと思っても、子どもを預ける人がおらず時間がとれない親、あるいは、子どもと一緒に過ごす時間を削って自分のために相談機関へ通所する行為を申し訳ないと思いきそれが精神的負担となる親、自分がストレスを感じていることさえも否定しようとする親などがある。言い換えるならば、「いい親」を期待する社会的圧力に応えよ

うとしてストレスを感じていても自ら助けを求められない・求めようとしない親、社会が期待する親像を自己像と思いきこんで自己の「内面」を持ちにくい親、が多く存在しているといえる(松永, 2006)<sup>(1)</sup>。本論文では、“自己の問題を自覚し自発的に行動して解決する能力”をひとまず「主体性」の定義としたい。現代社会は、この意味での「主体性」が子育てにおいて発揮しにくい社会であるといえるであろう。

近年、“いい親”を期待する社会の圧力は増大している。また、それと同時に“虐待する親”像に関するイメージも社会全体に蔓延している。その要因として、児童虐待への対応が子どもの安全確保のために親子関係に問題が生じる

初期段階での処遇方針の決定により、虐待が起るリスクを摘み取る方法が強調されている点があげられる(加藤, 2001)(山田, 2006)<sup>(2)</sup>。この方法は、児童虐待件数の増加に伴って一定の支持を得ており、2001年より児童相談所および児童福祉関係機関において「一時保護決定に向けてのアセスメントシート」が使用されている(日本子ども総合研究所, 2001)。

しかし、この方法は子どもの生命のリスク管理にはなりえても、親の「主体性」を強化するような問題解決的アプローチにはなりえないと指摘されている(竹中, 2008)<sup>(3)</sup>。また、上野(2003)は、リスクアセスメント指標を重視する考え方は近代的家族像から外れた対象にレッテルをはり、専門家あるいは関係機関のネットワークの監視下におき、「正常」な家族と援助が必要な家族の区別を強固にする働きをしていると指摘している。そして、多義性を喪失した価値観が社会全体に広がり、親子、特に母親が、「主体性」の成立しない領域へ囲い込まれていると批判している。

このため、問題解決的アプローチの一つの可能性として、コミュニティの生成が見出されている。ここでは、親子がリスク管理によってさらされている、負のレッテルをはられ監視下に置かれる他者との関係性から離れ、他者と親密な関係を経験し、親が自らの意志で親子関係を良い方向へ変化させることが目指されている(大串ら, 2009)(加藤純, 2006)。つまり、リスク管理の徹底は、親子から「居場所」を奪う傾向を持ち、コミュニティ再構成の試みは、「居場所」の確保により親子の主体性を回復しようとしているといえる。

本研究ではこういった親の「主体性」を回復、あるいは育む場としての「地域子育て支援センター」の可能性を明らかにしたい。「地域子育て支援センター」とは、1997年のエンゼルプランによって、全国の市町村に設置された、乳幼児とその保護者(以下「親子」とする<sup>(4)</sup>)がともに遊ぶフリースペース(「親子の広場」と、子育て相談などの機能を併せ持つ児童福祉機関である。現在日本全国に4500か所程度存在し、増加傾向にある。現状では、

「地域子育て支援センター」の活動内容は場所によって差があるが、親子同士の親密な人間関係の構築や、ソーシャルワークによるサポート等、包括的援助が行われていることが多い。

この目的のため、本研究では、「A市子育て支援センター」の「親子の広場」の参与観察とスタッフによる援助記録の分析により、「子育て広場」に來所する親子同士の関わり合いの特徴を記述し、さらに上記のように主体性を持ちにくい状況におかれ、さらに虐待をする直前まで追い詰められていたある親に対するスタッフの援助実践を記述する。

結論を先取ると、第一に「親子の広場」が「親子が肯定的に受容されながら、他者と共感したり、主体性を獲得したりすることに魅力を感じて、自発的に通う経験をする場」、すなわち「居場所」となること、第二に「居場所」では、スタッフの來所者に対する「受容的な援助規範」が働き、それが來所者間に共有されていること、第三に「居場所」では親にとっての「他者」像が変化し、親の主体性が生まれ、親子関係が肯定的に変化する可能性を指摘する。

## 2. 方法

### 1) 研究の対象と方法の選択

研究対象とした「A市子育て支援センター」を選択したのは、1980年代から子育て支援に取り組み、実践の中で「広場」の機能と意義を見出してきた歴史があり(飯田, 2001)、スタッフもまたその点について共通認識を持っている可能性が高いと考えられたからである。

研究方法としては、「仮説生成型の研究」(箕浦, 2000)としてフィールドワークを行った。すなわち、「状況と主体との相互交渉の過程で、各人が意味世界を構築する具体的プロセスそのものの理解とそこにマクロな諸力がどう投影しているかを読み解く」(箕浦, 2000)ため、Ⅱ.ではまずフィールドへ参入し、データ収集と分析を同時に行いながら仮説を生成する参与観察を、Ⅲ.ではスタッフによる援助の記録の記述者と読み手の間で共通理解を可能にするために不可視的に働いている、援助の規範を読み解く分析を行った。

## 2) 参与観察と言説分析の方法

参与観察は、「A市子育て支援センター」にて平成15年7月から平成18年8月までの期間、週に1～2回行った。そして、週1回行われる事例検討会に参加した<sup>(5)</sup>。その中で、2種類の記録をとった。第一に、親子の広場の来所者と職員の言動の記録であり、「親子の広場」内で5日間定点観察を行い、来所者と職員の動きや会話を筆記で記述した記録である。第二に、事例検討会の記録であり、事例検討会の録音記録である。II. では、第一の記録の、1日分の記録に基づき、「A市子育て支援センター」の活動を示す。また第二の記録を、この日の状

況を読み解く手掛かりとする。III. では、3年以上にわたる関わりの中で、良好な親子関係を形成していった母親Bの援助実践についてスタッフが記述した「個人記録」を分析の対象とする。

## II. A市子育て支援センターにおける「親子の広場」の参与観察

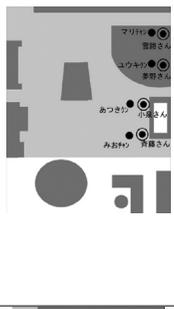
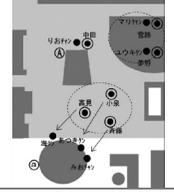
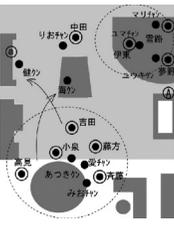
### 1. 「親子の広場」における親子とスタッフの言動の記録

表1に、「親子の広場」の概要を、表2、表3に「親子の広場」の時間ごとの様子を示す。

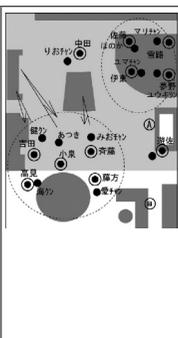
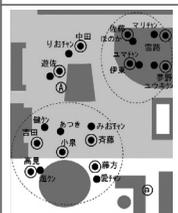
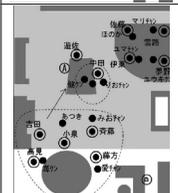
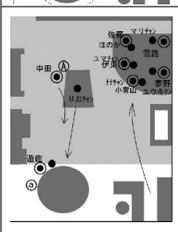
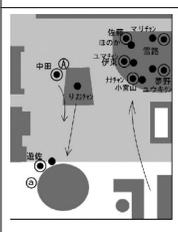
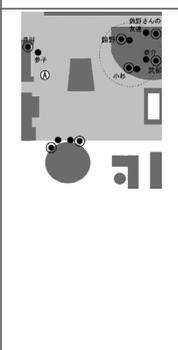
表1 「親子の広場」の概要

|         |   |
|---------|---|
| 運営主体    | 福祉財団による委託事業   |
| スタッフの数  | 常勤1人（スタッフS）、他非常勤5名。2名ずつ勤務する。  |
| スタッフの資格 | 研修を受講した者の中から選ばれる。   |
| 開場時間    | 毎日月曜から土曜、朝10時から3時まで開場。  |
| 活動内容    | 「親子の広場」の提供と電話相談を活動の中心とし、その中から、個別面談、家庭訪問、子どもの預かりなどの必要性が見出された場合はこれらを行う。開場時間後は、毎日反省会、日誌、週に一回の事例検討会を行う。                     |
| 広場内の環境  | <p>A市立保育園内の一室が使用されている。面積40㎡。どこにいても部屋全体が見渡せる小さな空間である。<br/>         ●は親を、●は子を、Ⓐは常勤のスタッフSを、小文字のⒶは非常勤のスタッフを指す。人物名は全て仮名。</p> |

【表2】「親子の広場の様子1」

| 時間    | 全景  | 動き   | 会話   |
|-------|---|--|--|
| 10:25 |    | 雪路さん来所<br>マリちゃん (4ヶ月)<br>夢野さん来所<br>ユウキくん (4ヶ月)<br>小泉さん来所<br>あつきくん (1歳1ヶ月)<br>斉藤さん来所<br>みおちゃん<br><br>雪路さんと夢野さんは一緒に初めて来所した。赤ちゃんコーナーに座る。斉藤さんと小泉さんは、ベッドを背にして立ったまま二人に話しかける。         | 小泉：かわいいですね。こんな頃もあったんだなあーって思っちゃう。<br>雪路：ちょうど、1歳上なんですわ。一年後にはこんな風になってるのかなあ。かわいいわ。<br>斉藤：ほんとほんと、もう、このくらいの時、何をどうやって育てたかとか忘れちゃうね。<br>小泉：2人(マリちゃんとユウキくん)は、よく似てますよね。双子みたい。<br>夢野：えっ。そうですかー。雪路さんと夢野さんは、小泉さんと斉藤さんに向かって、子どもを抱いて立たせ、お人形のようにして挨拶するように動かす。<br>夢野：よろしくおねがいします。<br>雪路：よろしくおねがいします〜。<br>斉藤：小泉：かわいいー。  |
| 10:30 |    | 高見さん来所<br>海くん<br>中田さん来所<br>りおちゃん (1歳1カ月)   | 高見：何歳ですか？<br>中田：1歳1箇月です<br>高見：じゃあ、あつきくと近いね。<br>海くんが高見さんにままごとのケーキを持ってきて渡そうとする。<br>高見：ケーキくれるの？ありがとう。<br>高見：ケーキ食べさせた？誕生日？(小泉さんに向かって)<br>小泉：食べさせちゃった。  |
| 10:35 |   | 伊東さん来所<br>ユマちゃん (4ヶ月)<br><br>赤ちゃんコーナーに行く。<br><br>藤方さん来所<br>愛子ちゃん (1歳3ヶ月)<br><br>吉田さん来所<br>健くん (1歳2ヶ月)<br><br>フリースペース内が、1歳児の常連の母親グループと、赤ちゃんコーナーのグループに別れる。中田さんはどちらのグループからも離れている。 | 赤ちゃんコーナーでの会話<br>雪路：(自分の子を見ながら) 何考えてるんだろうね…よく家で、“いないいないばあ”をするんだけど、一人でやっているのむなしなんだよね。<br>斉藤：(子どもは) 笑う？<br>雪路：たまに…。<br>斉藤：それはさあ、もっと大袈裟に、いないいないばあっーってやらないとダメなんだよ。<br>雪路：そんなの恥ずかしくて絶対ムリー(笑)。<br>夢野：見て。ミルクをすごく飲むから、二重顎になってる。<br>雪路：うちなんて、寝る時にこするから、髪の毛なくなってるよ。<br>夢野：うちも、左向きにしか寝ないから、(頭の) 左がまっ平ら。<br><br>常連の母親グループ内の会話<br>吉田：やっぱり、親がもーっとなるのを見て、子どもも覚えるのかな。<br>斉藤：私も放り投げるもん。怒ると。大人気無いよね(笑)。<br>高見：もー悪魔に見えるもん、この人の動きが。笑ってるのにね(笑)。<br>藤方：寝ないし。<br>斉藤：何時に寝る？<br>藤方：12時くらい。<br>斉藤：うちも12時くらい。みんな遅いんだ。昼寝を短くしろって言われるけど、揺り動かしても起きないし。気持ちよく寝てるのに、起こすのもなあと思うし。<br>藤方：そうだよな。<br>高見：うちは、8時半に寝るよ。<br>吉田：へー。<br>高見：それで、6時に起きる。<br>吉田：げー。<br>斉藤：いつも？<br>高見：いつも。<br>斉藤：でも、まあ、それは普通だよな。正常。<br>藤方：でも、もっと寝てほしいでしょ？<br>高見：寝たいよ。朝キツイし。<br>藤方：えらいよ。 |
| 11:00 |  | 佐藤さん来所<br>ほのかちゃん (四箇月)<br>来所してすぐ、A アドバイザーに検診する病院について相談する。<br>遊佐さん来所<br>マユちゃん (1歳11箇月)<br>初来所。  | 佐藤：健診ってどこに行けばいいんでしょう。<br>A：健診は近いところで、普段の診療は馴染みのところって使い分けしてる人もいるわよ。<br>佐藤：どこにいけばいいのかわからなくて。<br>A：もう皆さん4・5箇月検診って終わってます？<br>(1)<br>雪路：まだですね<br>(グループ内で話が続く)   |

【表3】「親子の広場の様子2」

|  |  |   |
|--|--|---|
| <p>11:15</p>    | <p>佐藤さんとはのかちゃん、赤ちゃんコーナーへ行く。<br/>佐藤さんトイレに行く。その間グループのみんなで、はのかちゃんを見守るが、泣いてしまい、あやす。<br/>佐藤さんが戻ってからは、赤ちゃんコーナーのグループは全員授乳を始める。<br/>常連の母親グループは、話が盛り上がり、子どもは遠くで遊んだり、母親のところに戻って来たりしながら離れて遊んでいるあ。</p> | <p>赤ちゃんコーナーの会話<br/>雪路：近所に友達がいる、1歳くらいの子なんだけど、その子と一緒に遊んでいたけど、家が（佐藤さんと）目の前だったの。<br/>佐藤：はい、そうなんです。<br/>夢野：どこ？<br/>雪路：駅の側の、向いのマンション。<br/>夢野：へえ。ベビーカーで行き来できちゃうね。<br/>佐藤さんトイレに行く。その間グループのみんなで、はのかちゃんを見守るが、泣いてしまい、あやす。<br/>佐藤さんが戻ってからは、赤ちゃんコーナーのグループは全員授乳を始める。<br/>常連の母親グループの会話<br/>斉藤：けんちゃん、大人っぽくなったよね。髪型。<br/>吉田：そうそう。ちょっとキャラ変えようかと思って。甘えんぼキャラから。</p>                                     |
| <p>11:20</p>    | <p>スタッフA、中田さんと遊佐さんの間に入る。<br/>りおちゃんとマユちゃんが、滑り台で遊んでいる。<br/>海君は眠ってしまう。</p>  | <p>常連の母親グループの会話<br/>斉藤：抱っこされて寝ている海くんを見て）その寝方が一番かわいいよね。<br/>藤方：うちも抱っこじゃないと寝ない。<br/>吉田：うちも昨日（抱っこ以外の方法を）試してみたけど、抱っこじゃないとだめで。<br/>斉藤：かわいいよね。<br/>高見：寝てる時が一番可愛いよ。優しくなれるもの。怒るとだんだん、敬語になる。“いつまで寝てるんですか？”とか（笑）<br/>斉藤：汚い言葉よりいいよね。</p>   |
| <p>11:25</p>    | <p>中田さんの周りに子どもが三人集まる。（遊佐ゆみちゃん、中田りおちゃん、吉田けんちゃん）</p>   | <p>夢野：すごい、保母さんみたいだ。<br/>中田：（子どもたちに向かって）できるかな？すごーい。ぱちぱち。お姉さん（遊佐さんの子どもゆみちゃんに向かって）できたね。すごいね。<br/>遊佐：もうすぐ2歳になるんです。</p>  |
| <p>11:15</p>   | <p>小宮さん来所<br/>ナナちゃん（4ヶ月）<br/>仲良しグループは帰る用意をする。ままごとコーナーの空間が空いたので、遊佐ユミちゃん、中田りおちゃんが遊びに来る。<br/>遊佐さんとスタッフAが話しをする。</p>  | <p>遊佐：保育園に入るの大変なんですか？<br/>A：大変だけど、申請しないと始まらないね。早ければいいっていうものじゃなくて、審査に通るかどうかだから…<br/>遊佐：働き口を今から決めるので、もうちょっとしたら申請しようと思っていたけど、もう見つけておかないと、就職も決まらないし…この保育園は厳しいんですか。<br/>A：ここは駅から近くて人気だから、（候補として）考えない方がいいよ。A市で働いてて、違う場所に住んでるっていう人の枠もあるみたいだから。それによって申請の形も変わるわよ。<br/>遊佐：そういうこともできるんですか。</p>   |
| <p>11:25</p>  | <p>武田さん来所。<br/>京真くん（四ヶ月）<br/>たまたま小高さんの子どもヒロくんと同じ服を着ていて写真を撮りあう。<br/>井川さん来所<br/>夢子ちゃん（1歳3ヶ月）<br/>ママゴトコーナーでは、二組の親子が遊んでいる。</p>   | <p>井川さんは、子どもに粗暴な口調で接するため、他の母親から敬遠されがちである。そのため、井川さんは、気の合う人がいないと一人であることを選ぶが、寂しさを感じている。その時には、スタッフが井川さんと話すように援助している。</p>  |
| <p>11:25</p>  | <p>赤ちゃんコーナーでは鈴木さんが中心的に喋り、場を盛り上げている。<br/>井川さんはベンチで本を読んでいる。夢子ちゃんは母親にべったりしている。<br/>そこに、スタッフAが関わる。<br/>ままごとコーナーの親子は帰る。</p>   | <p>井川：昨日実家に行く予定だったけど、ユメユメのお腹の具合がわるくなったからやめた。牛乳アレルギーかもしれない。中学の時の同級生が妊娠したんだ。<br/>アドバイザー：結婚はしてるの？<br/>井川：してる。だけどそいつ、（略）バカで、子どもは生まれたときからハイハイすると思ってるようなヤツだからさ心配なんだよ。<br/>アドバイザー：そうね。それなら楽よね。<br/>井川：動物と間違えてるんだ。テレビとかの動物番組と同じと思ってるんだ。自分がつわりなのに気付かないで、気持ち悪くなったからって胃カメラ飲んだからねそいつ。バカ。<br/>アドバイザー：ははは。<br/>井川：（ここに）連れてきたいんだよね。<br/>アドバイザー：連れてきていいよ。妊娠中でも、こういう場所に來たら、赤ちゃんがどんなかわかるかもしれないしね。</p> |

## 2. 「親子の広場」の交流の特徴

### 1) 情動的関係

「親子の広場」では、一組の親子間の交流が、他の親子（他者）にも伝わり、来所者の間に「情動的な関係」が生じている。それは、心理的な一体感の波及する状態、あるいは相手との違和感が生じる状態、またはその両方が同時に生起している状態である。

他者との一体感が生じる例としては、「親子の広場」で日常的に見られる光景である、親同士の自己紹介の際に、親が月齢3ヶ月の乳児を抱きながら、幼児言葉で「僕は〇〇（苗字）です。よろしくでしゅ。」というように、紹介しあう様子があげられる（表2, 10時25分）。これは、親と子の一体感が他者を巻き込んでいく状態を示している。また、他者が自分の子どもを褒める行偽や世話をする行偽は（表2, 10時25分）、親と子どもに一体感がある場合には、親自身もまた他者に受容される感覚を促している。

この受容の感覚が、他の親子の愛情あふれる関係が自分の喜びでもある関係に繋がることを、別日の鈴木さんと坂下さんの交流の事例は象徴的に現している。坂下さんは、他者から排除されているという意識が強い母親であったが、鈴木さんとの交流において、鈴木さんが可愛がっている子どもを抱かせてもらう経験をした。この行為は、坂下さんにとっては仲むつまじい関係にある鈴木さん親子の一部を渡されることを意味し、存在をまるごと受容されることを意味する。スタッフもまた、この行為が坂下さんの喜びにつながると感じ、抱くことを躊躇していた坂下さんを後押ししている<sup>(6)</sup>。

しかしながら一方で、他者の行偽が好ましくないと感じる場合には、他者との違和が生じ、存在を否定するような状況が起こりうる。この違和感が孤立につながる例は、表3の13時10分に現れていた。井川さんは、独特な口調で話す若い母親であり、子どもに乱暴な口調で接するため、他の母親から敬遠されがちである。スタッフは、井川さんと気の合う人が「親子の広場」にいない時には、スタッフが井川さんと話すように援助している。

さらに、「親子の広場」では、違和感と一体感が同時に生起する状況も生じる。例えば、親が子どもを広場においてトイレへ行く時に他の大人が子どもの世話をする場合がある（表3, 11時15分）。トイレから帰ってきた親は、自分の子どもが自分以外の人に抱かれているのを見て、親自身もまた他者に受容されている状態を感じる（他者との一体感）。にもかかわらず、自分以外の人に抱かれている自分の子どもが幸せそうにしている状況に、寂しさを感じ（子どもと他者への違和感）、逆に自分の子どもが泣いていれば、親子のつながりを感じて幸せな気持ちになる（子どもとの一体感）。

これらのような理屈を超えた情動、つまり違和感や共感、は「親子」のような親密な人間関係において濃く表れ、子どもを媒介として他の「親子」との間にも拡張されている。

### 2) 客観性の獲得

1) でみた「情動的な関係」とは対照的に、「親子の広場」では、親が子どもと心理的に一体となっている状態から、第三者の存在を意識し、第三者の視点から自分を見ることにより、個人としての「主体性」意識を取り戻す姿も見られる。説明を加えると、孤立した家庭環境の中で情緒的に一体化している親子が、家庭で子どもを可愛いと思う気持ちと、思い通りにいかない不快感との両方の感情を抱いている、いわゆる「育児不安」の状態は、「親子の広場」に来所し、他者と出会い、他者の視点から、自分と子どもを客観的にとらえることにより解消される可能性がある。

第三者の視点によって親が主体性を取り戻す例は、表2の10時35分に象徴的に現れていた。この事例では、母親たちは、家庭での子どもたちの様子を話し、辛い話を笑い話にしている。また、家での子どもの様子の話が尽きた場合、今現在目の前にいる子どもの動きを見ながら、これを話題としていた（表3, 11時20分）。このような会話は、見慣れた子どもの様子を、他者の視線を意識して話すことによって、楽しみに変えているといえる。また、自分が母親としては“ダメな母親”であることをあえて笑い話

の種とし、母親という役割とも距離をとろうとしていた。そして、他の母親にこの話を肯定的に認めてもらうことによって、再び、母親の役割を引き受けようとしていた。このように、子どもと自分を離れた上で子育てに前向きに取り組もうとする姿が見られる。

また、第三者の視点を具体的な他者よりも、他者の経験を通して見出した「子育ての伝統」という比較的抽象的な規範に求め、子育ての困難を相対化し引き受けようとする姿も日常的にみられる。例えば、別日には、理想的な量のミルクを子どもが飲まないで悩んでいる親が、信頼しているスタッフから同じ経験をしたと聞かされ、個人的な苦しい経験を、繰り返されてきた歴史の一部として捉えなおして相対化し、状況を受け入れる姿があった。

以上のことから、「親子の広場」で起きる状況として、1)では、「情動的な関係」ゆえに感じられる一体感と違和感の両義的な状況（および一体感から生じる癒しもあり得る状況）を、2)では、両義的な状態を第三者的視点によって乗り越える状況をとらえてきた。この二つは対立するものではなく、1)の状況が関係性の基盤となり2)の状況を引き起こす場合もある。

### 3) スタッフの援助により得られる受容的感觉

来所者の中には、「親子の広場」を“実家”と表現して親しみを抱く親が少なくない<sup>(7)</sup>。このことから親の多くは、スタッフや来所者から受容される感覚を抱いているといえる。それが可能になるには以下に述べるような、「親子の広場」での交流によって生じる違和感を緩和し、来所者が相互に受容的態度をとるよう援助するスタッフの姿勢があるからである。

「親子の広場」は、親が自発的に通う場所であるため、誰が来所するかを予め知ることはできず、予期しがたい状況が発生する可能性が無限にある。そのため、来所者の組み合わせによってはスタッフの援助が必要な状況が、複数、同時に、フリースペース内の別々の場で生じる「多重な状況」が起こりうる可能性がある。スタッフはその可能性を意識しながら臨機応変に

対応している。例えば、11時には（表2）、佐藤さんが初来所し、スタッフに乳幼児健診について相談をした。スタッフは佐藤さんと同月齢の子どもをもつグループに話しかけ、佐藤さんがそのグループに参加しやすいようにしている。佐藤さんは、グループの側に座り、しばらく会話をしたあとトイレに立った。佐藤さんの子どもは泣き、赤ちゃんグループの母親達があやし始める。これとほぼ同時刻の11時20分（表3）には、中田さん親子と遊佐さん親子の交流が見られた。最初に中田さん親子が滑り台で遊び、遊佐さんの子どもも遊び始めるが、二組の親子は滑り台を共有しながらも無言であった。そこに、スタッフが、佐藤さんがトイレに立つ様子を気にしながら、この二人の間に座り、二組の交流を促した。また、13時10分（表3）には、常連の親子が部屋の奥にグループになり、ままごとコーナーには二組の親子がいた。そのような状況の中、前記の井川さんが来所した。井川さんは、いつも、気が合いそうな人がいないと判断すると、一人であることを選ぶが、寂しさも感じている。スタッフは、周囲の親子の様子に視線を向けつつも、井川さんと共にベンチへ座り話をした。このように、スタッフは、「多重な状況」に身体行為や言葉によって対応し、交流によって生じうる違和感が緩和するように援助している。また、スタッフは、毎日、来所者全員についてスタッフの見聞きしたエピソードを記録して来所者のニーズや性格について情報を集めており、来所者同士の関係性によって表れる状況の変化に対応できるように意識している。

以上からⅡ.のまとめとして、「親子の広場」とは、スタッフの「多重な状況における言葉と身体行為によって交流によって生じる違和感を緩和する援助」によって「親子同士が互いに肯定的に受容されていると感じながら、他者と一体感を感じたり、主体性を獲得したりすることを魅力と感じて、自発的に繰り返し通う経験をする場所」、すなわち「居場所」となっていると考えられる。つまり、ここは親子にとって生活に組み込まれた場所となっており、“相談”という形態をとらなくとも日常生活の中で子育て

での負担を楽しみに変換する働きがあると予想される。これについて次節でさらに追究する。

### Ⅲ. 母親Bと子どもへの援助の「個人記録」の言説分析

Ⅲ. では、虐待をする可能性が高いとされていた母親Bが、スタッフとの約3年の関わりの中で良好な親子関係を形成した事例を50日分の「個人記録」を基に分析し、「居場所」が果たした機能を見出す<sup>(8)</sup>。1. の下線部は、2. 3. にて括弧内カナとして示して参照する。

#### 1. 「個人記録」をもとに筆者がまとめた母親Bへの援助事例概要

母親Bは、「親子の広場」に来所する以前より、「児童虐待」を扱う多数の機関と関わってきた。その時期の母親Bは、相談する機関によって、主訴の背景や理由を変化させて話していた。そのため、母親Bの全体像を把握し継続的に関わっている機関は無かった。

その後、母親Bは、「A市子育て支援センター」に来所する。この時に、スタッフNに対して「初期の告白」が語られた。「個人記録」(以下、記録)をもとに筆者が個人を特定できないよう、事例を歪めない範囲で創作を交えながらまとめると、「(前半は、原家族で自身が受けた虐待、前夫の子(Cちゃん)に対する虐待や児童相談所との関わり、前夫との結婚と離婚の経緯) 現夫との間に第二子(Dちゃん)を出産した。しかし夫は籍を入れるという話を進めない。そして、夫は子育てを手伝わず、批判ばかりする。また、夫は自分の収入は全て使う。私は、夫から生活費として少額を渡されているがどこにも出かけられない。前夫の子を預けている親戚は「今度こそ幸せになって」と応援してくれるが、結婚に踏み切らない夫がいる。子どもを叩いてしまいそうになる。」という内容であった。記録によると、スタッフNは、母親Bの自己物語を傾聴し、子育てに苦しんだ経験を持つ来所者に母親Bとの会話や交流をうながした(ア)。また、スタッフNは、事例検討会議で、「自分の経緯を、たんとんと、話した。初対面の私に話したので、ちょっと驚いた。お

っと…これはちょっとこうやってひいて関わらないといけないママかなっ(イ)ていうのと、『ここ来てどうだった?』って聞いたたら、『来てよかった。楽しかった』って(母親Bは言っていたけれども)。で、私は、うーん社交辞令かなって。2度と来ないだろうなって思っていたら。月曜日に来たよ!うれしかった。(ウ)(略) 一筋縄にはいかないかなって思いました(エ)。」と述べている。また、この時期、スタッフNは、市からの要請で母親Bの処遇を議題とする「A市虐待防止会議」に参加している(オ)。」

その後、母親Bは、週に一回程度、継続的に来所し始める。初期には、スタッフNとのみ関わり、自らの経歴を一方的に話したり、依存的な行動をしたりするなどして、相手の反応を窺うような言動(カ)を見せることがあった。しかし、3年の間に、母親Bは、常勤のスタッフN、他のスタッフ、来所者、という順で交流をもつようになっていった(キ)。

さらにその後、母親Bは、スタッフNからの携帯電話のメールによる援助を受けつつ、他地域の子育てサークルへの参加を試み、何度かの挫折の後、継続的に通い始める。この時期、記録によるとスタッフは「一皮向けたような雰囲気」と感じている(表4下線(2))。そして、母親Bは、サークルに参加し始めた頃は、“サークル仲間に自分が受け入れられるかどうか”を気にしていたが、次第に“子どもが楽しめているかどうか”を大切にするようになる。スタッフは「(これは)母の感情。人として成長している」と記録している。

この時期に、「後期の告白」が語られた。記録をもとに筆者がまとめると、「実は、もう一人子どもがいる。その子に対してが最初の虐待であった。最初の子に会わずにいることが私の責任の取り方。今の夫は、その頃からの知り合いで私が家庭に向かないことをわかっている。結婚すると、私が出て行きたくなることを知っているの、内縁関係のままている。夫からは「いつでも出ていっていいよ。」といわれている。そう言われることで気が楽になる。この前、「ああ、疲れた。出て行こうかなあ」と言

ったら、夫は「え？本当に？」と動揺した。そのことが少し嬉しかった。」という内容であった。スタッフNは、「(Cちゃん、Dちゃんの他に)もう一人の子どもがいることと、その子が被虐待児であることを話してくれたが、これは支援センターとの信頼関係と継続的関わりのたまものとする。 (略) 母は、また一步前にすすんだのではと推察する。」と記録している。Dちゃんの幼稚園入園とともに関わりは自然に減少した。

## 2. 母親Bの援助経過に表れている「居場所」における援助の規範

### 1) 「個人記録」の記述方法に表れている「親子の広場」の特徴

「個人記録」の記述者は、援助対象者に関わったスタッフである。そのため、母親Bの記録については、常勤のスタッフNによる記述が多くなっている。また、この記録の目的は、週1回行われる事例検討会の資料としての使用であり、記録の読者は記述者以外のスタッフ全員である。事例検討会は、「親子の広場」では、スタッフの援助は「状況の多重性の中での身体表現と言葉」によって行われており、記述者は第三者的視点からすべてを把握することはできないため、スタッフ全員がそれぞれの視野から得た情報を総合して親子を理解する必要があるために行われている。

この「個人記録」は、「母親の言葉」、「広場における他の親子やスタッフへの関わり」、「スタッフの所感」の3欄に分かれて記述されている(表4、表5)。これは、「親子の広場」におけるスタッフの援助の前提である“人の行動、言葉の意味は状況や人との関係性によって変化する”という考え方の表れである<sup>(9)</sup>。この三点は、それぞれがそれぞれの解釈を規定している。例えば、「母の言葉」は、「広場での他者との関わり」や「所感」によって解釈が変わりうると考えられている。そのため、事例検討会は残された解釈の余地をめぐって、話し合われる。「所感」欄は、「がんばりすぎなければよいが」「相当信頼してきてもらっていると感じる」などの主観的かつ共感的な記述が多いが、この

ような個人的主観を、話し合いを通して、間主観に変化させ、共通認識がつくられていくのである。

一方で、「個人記録」は、記述の時点で既に記述者の編集方針によって情報の取捨選択が行われ、解釈の方向づけがなされていると考えるべきである。その方針は、この場合、“基本的に親子を肯定的にとらえる”というものである。「個人記録」は、50日分もの量に及ぶが、B親子の肯定的なエピソードが積極的に記入され、否定的な要素を含むエピソードは6件であった<sup>(10)</sup>。さらにその6件に関しては、「今はこれでいいのだろうか」「見守りたい」など、価値判断を留保する所感が記述されている(表5下線1)。また、一般的には些細な内容であっても(表4下線1)、援助経過の文脈の中で進歩ととらえられれば積極的に肯定されている(表4下線2)。つまり、この記録は広義では肯定的な内容のみが書かれているといえる。このようなある意味、不自然ともいえる編集方針が、スタッフ間において説得力を持つ理由、ここに働いている援助の規範、については次項での分析とともに考察を行う。

### 2) 援助経過にみられる「親子の居場所」の特徴

本項では、初来所時と、他の福祉機関との連携時におけるスタッフの援助に焦点をあて、スタッフの援助に働く規範を見出す。なぜならば、母親Bの「リスク」の高さが際立つ時に、スタッフの援助の特徴が顕れやすいと考えるからである。

スタッフNは、母親Bの初来所時に母親Bの抱えている問題の大きさを感じていた(エ)。なぜなら、母親Bの身の上話が「虐待の世代間連鎖」を感じさせる内容であり、またそのような話を母親Bが初対面の相手にことが依存性の強さを示していたからである。しかし、それ自体は母親Bを排除する理由にはならず、スタッフNは、親子との交流を促し(ア)、事例検討会では「月曜日に来たよ！よかった」と再来所を喜んでいる(ウ)。また、個人記録には「子どもが午睡する時、自分も寝ればよいと(誰か

【表4】「個人記録の例」

|   |
|---|
| <p>H16.8.12 【来所】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Dちゃん、意志出てきて、玩具取られると怒ってふてくされる。母、「おちついて、おちついて」となだめる。</li> <li>・大混雑のフリースペースの中でも、すぐに帰ることなく1時間半ほど遊ぶ。緊張した表情もなく、自然に打ち解けている様子だった(1)</li> <li>・Y市の地域子育て支援センターへ3回ほど「交通手段」を使って行った。手遊びなどのプログラムもあるところである。だんだん慣れてきた。スタッフから、「一緒にやらなくてもいい、自由に過ごしていい」と説明があり、ほっとした。</li> </ul> |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・年少から幼稚園にいれるか、サークル参加をするか考えている。(近隣のサークル情報を提供)</li> <li>・サークルでは、子どもは最初は泣いていたが、その後、遊びだす子どもの様子を見て、安心した。</li> <li>・おむつ代をはじめとしていろいろとお金がかかるが、夫は子どもにかけるお金に関してはこだわらない。</li> <li>・「幼稚園の入園費用について」</li> </ul>  |
| <p>所感</p> <p>Y市の地域子育て支援センターへ行ったり、サークルへの参加意志も以前よりも積極的に見受けられた。一皮向けたような雰囲気さえ感じる(2)。子育てサークルへの参加で自信と折り合いがついてきたのだろうか。</p>   |

【表5】「判断保留の記述の例」

|  |
|--|
| <p>H15.7.24 【電話相談後、来所】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・電話相談、Cちゃんを預かっている親戚名が通院のため、Cちゃんを預かった。幼稚園の子でもA市子育て支援センターに行くことができるか?とのこと。その後、来所。</li> </ul>  |
| <p>【母とCちゃんのエピソード】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Cちゃん、ままごととんとんをやるので、テーブルの上のDちゃんをおろして欲しいと要望。スタッフ、Dちゃんが母から離れた直後なので(母は電話のため外へ)「Dちゃん、ここにいたいみたいよ。邪魔しないと思うから、お料理やってみて。」と伝え、「じゃ、いい。」と下を向く。スタッフがDちゃんを膝に乗せて、抱いても、「もういい。」と返答。</li> <li>・スタッフが外にリスがいることを発見。スタッフMと共に外へ見に行く。もっとしっかり見たいと門の外へ出たいと要望。スタッフM、危ないと思ったが外へでる。見失ったことを確認すると、素直にA市子育て支援センターに入る。</li> <li>・母子、公園で弁当を食べる約束をする。Cちゃん、サンドイッチを要望。「えーサンドイッチ」と母にとっては意外な要望だったのか、驚く。「じゃ、ママはお弁当」というと、「Cも」という。「サンドイッチ?」と母が聞くと、「サンドイッチがよくなった。ママと同じがいい。」という。</li> </ul> |
| <p>所感</p> <p>Cちゃん、初めての来所。母子のやりとりを見ていると、母はCちゃんに遠慮がちな対応をしているように見受けられる。母子のエピソードやCちゃんの表情から察するに、Cちゃんはもともとナイーブで、かつ自分の気持ちを飲み込むタイプに感じる。はっきりものを言う母にとっては、もどかしい存在かも知れない。母が虐待に至った要因の一つとして、互いにもって生まれた性格に起因するのではと考える。Cちゃんに気遣いする母、母を求めつつストレートに伝えられないCちゃん、二人の関係は今ほこれがベターなのだろうか(1)</p>  |

の助言) 考えを変えたら、夜泣きに対するイライラもへった。離乳食は(略)今まで本の通りに作っていたが、ベビーフードを使う(これも誰かの助言)ことにした。気持ちも楽になってきた。」(括弧内原文)と記述し、誰かのアドバイスをもとに行動を変える力に肯定的な面を見出している。

さらに、A市虐待防止会議への参加(オ)においても母親Bに対して肯定的な面を見出す姿勢は貫かれていた。A市虐待防止会議では、児童相談所や保健所をはじめとする参加機関は、「子育てに対して無理解で、批判ばかりする、経済面・精神面において支配的な夫に対して、ストレスを募らせている母親B」という共通認識を持っていた。これに対し、スタッフNは、この見方を保留し、会議参加後に、「母、浪費癖があるので、一日の生活費の全額を毎日渡されるほうがよいと思っはいるが、気に入った子ども服が目につくと(子どもの服は夫がまとめて買ってくれる)、イイナ、と思う。」、「夫に対して腹の立つときは、少々身体に関する嫌味を言うことにしている。『ずいぶん、おなかが出たね。』など。」という母の言葉や、「家族で旅行する夢を持つ夫」のエピソード等を記録している。これらの記述には、夫に一方向的に虐げられている母親B像とは異なる面が見出されている。さらにスタッフNは、「(略) ゆっくりと自分と折り合いをつけている様子も見られる。Dちゃんは順調に育っている。」と母親Bに対して肯定的な所感を記述している。

このようにスタッフが親の肯定的な面を見出していく動機、肯定的な記録が説得力を持つ理由は何か。それは、「親子の広場」の大前提に由来していると考えられる。「親子の広場」は、親が自発的に来所する場所であり、来所を継続するかしないかを決めるのは親であり、スタッフはそれを強制できない。すなわち、「親子の広場」において、スタッフはⅡ. 2. 3)で示したような援助によって親の継続的な来所を促し、親はこの場所が自分たちにとって「違和感」のない居心地のよい場所かどうか見定めるといふ、対等な立場での駆け引きが行われていることを示している。この駆け引きの末に、親

が継続して通うことを選択した場合、その選択自体が、スタッフにとって“子育てに前向きな姿勢”をもつ親であることを意味し、肯定的に受け止められるのである。以上のことから、Ⅲ. 2. の結論として、この、“来所すること自体による肯定的評価”が、スタッフによるあらゆる援助の前に既に親に与えられ、いかなる場合も揺らがないことが、スタッフの援助の規範であるといえる。

### 3. 母親Bの主体形成のために「居場所」の果たした役割

Ⅲ. 3. では、スタッフの援助の規範が、母親Bの親子関係を変化させていく過程を、母親Bの初期と後期の告白内容の変化から見出した。浅野(2001)は、自己物語は常に「他者」との関係の中で生まれ、自己物語に先立って自己は成立しないと述べている。ここでは、母親Bが自己物語を語る相手として想定している「他者」の規範の変化を分析する<sup>(11)</sup>。

母親Bの初期の自己物語は、多数の福祉機関に語られてきた。その内容は、機関に合せて主訴の背景が変えられ、期待される近代家族の形式を実現しようとし、それが出来ない原因を夫に求めるものであった。また、スタッフNは母親Bの初来所時にこの自己物語を聞きながら「引いてかかわらなくてはと思った」と述べており、母親Bから情動的な同一化を強く求められていると感じている(イ)。つまり、母親Bにとって各機関のスタッフは、それぞれが存在する場所に独立して存在し、近代家族の形式を満たしているかを問題にし、自分を助ける力を持つが遠くに感じる権威者である。同時に、彼らの問題とする家族の形式(規範)を満たせば情動的な同一化が可能となる「他者A」として表れている。但し、今は形式が満たされていないので、母親Bがそれに近づこうと努力する限りにおいて(告白もそのための手段)、基本的には否定的にとらえているが部分的な肯定を母親Bに与える「他者A」である。

しかし実際には、母親Bが自己物語を話す「他者」は、母親Bが想定する「他者A」とは違っている。母親Bが接している福祉機関の相

手は、ネットワークで繋がり情報を共有し、形式を通して母親の精神的なリスクという抽象的な要素を査定するシステムである。このシステムは、現代社会における全家庭を問題視し、その中でも母親Bを否定的に認識し、二重に否定している。つまり、「他者A (A')」よりも抽象的な「他者B」であり、母親Bの望む心情的な同一化は叶わない。母親Bと「他者」の間にはこのような齟齬があった。

初来所時に、母親BがスタッフNに一方的に「初期の自己物語」を話したのは、今までの「他者A (A')」と「A市子育て支援センター」を同じとらえているからである。けれども、「親子の広場」は、II. 2. でみたように告白を主目的とする場ではなく、日常的な交流の場であるため<sup>(12)</sup>、母親Bの行動は異様に映る。スタッフNもまた、事例検討会で「おおっと思った」と述べているように、戸惑いを感じている(イ)。しかしながら、母親Bにとっては、今まで関わってきた機関よりも「親子の広場」は、「来所自体により得られる肯定的評価」が得られるため、求めてきた心情的同一化の感覚に近いものが得やすかった。それは、スタッフNが、母親Bの「また来ます」の言葉に「もうこないだろう」という反対の意味を感じ取っている点に表れている(ウ)。これは、基本的には心情的に同一化しているにもかかわらず、当然のことながらスタッフNと母親Bは別人なので、完全にはしきれない両義的な部分が残る違和感が起こす意味不決定の現象である。この場合、母親Bにとっては、受容されているのかされていないのか判断しかねる「他者C」が表れている。

そのため、母親Bは、その後、意味不決定の不安定さを克服しようと、スタッフNを試す行動をとっている(カ)。例えば、来所前には必ず「今からいきます」と電話し、スタッフNへの信頼感を表すと同時に、特別に関わりをもってほしいという依存的感情を表わし、それが可能かスタッフNを試していると思われる時期があった。また、勤務時間外の電話やメール、突然の来所、一方的告白も同様である。

このように、母親Bの思いは、スタッフNに

向けられている。しかし、母親Bは、常にスタッフNにその思いを受け止めてもらえるとは限らず、他のスタッフが母親Bに関わる場合もある。例えば、電話を受ける時や、「親子の広場」で表5のような関わりをする場合である。そういう意味では、母親Bにとっては、電話をかけることも、広場への来所も賭けのようなものであり、人付き合いの苦手な母親Bにとっては勇気のいることであつたであろう。

しかし、3. II (2) でみたように、事例検討会によってスタッフNと援助の規範を共有しているスタッフは、スタッフNと同じ見方で母親Bに関わることができる。この関わりによって、母親Bが、スタッフNとの1対1の関係では一体感と違和感を同時に持って不安定になっている部分を、1対複数のスタッフの関係に広げて多くの人からスタッフNと同様の肯定的な関わりを得られるようになることにより、安定化させられるのである。

この時、母親Bにとって「他者」は、具体的な相手として近くに存在する「他者C」よりも遠いかわりに、広場内の何時・何所でもスタッフNの規範を働かせて自分を肯定する「他者D」として現れる。つまり「他者C」は再び抽象化されている。この「他者D」は「他者A」と似ているが、「他者C」を経て生まれた他者であるため、母親Bに否定の中の部分的肯定ではなく、肯定を与える。この頃から母親Bは、他のスタッフや来所者とも関わりを持ち始めていった(キ)。

最後には、母親Bは、「親子の広場」の外に「居場所」を探し始める。この時には、母親Bにとって「他者」は、場所や時間の限定をこえて常に自分の近くに感じられる、すなわち、心の中に存在する自分自身ともいえる、さらに抽象化された「他者E」として現れる<sup>(13)</sup>。

つまり、母親Bは、ここに至って初めて「規律を内面化した個人」(Foucault, 1975=1977)となり、母親Bにとって規範は外から与えられるものではなく、自己の内面から働きかけるものになる。これによって、現在自分の置かれている状況を自己原因的にとらえると同時に、肯定的にとらえることが可能になっていく。

「後期の自己物語」は、この時に語られた。その内容は、「前期の自己物語」とほとんど同様の状況について、肯定的かつ自己原因的な語りとなっている。

このことから、本論の冒頭で「主体性」を“自己の問題を自覚し自発的に行動して解決する能力”と定義したが、母親Bは、「後期の語り」では、自分の問題は家族の形式ではなく自分の心の問題であることに気づき、自分に原因があると認識していると同時に肯定的に受け入れてもいる。そして実際の行動においても、母親Bは、A市子育て支援センターの外へと人間関係を広げていくことができた。つまり、母親Bはスタッフの援助によって「主体性」を得たのだといえる<sup>(14)</sup>。

以上のことから、Ⅲ. 3. の結論として、「居場所」は、母親Bのように、社会が期待する親像、この場合は“虐待する親像”を自己像と思いこんでいて自己の「内面」を持たないまま、共感を求めて生きている人に対し、「他者」との同一化を可能にして「主体性」を形成する機能を持っていると考えられた。そのためには、1対1の人間関係を、複数に広げていく必要があり、「居場所」のお互いを肯定的に受け止める人間関係が必要であった。

#### Ⅳ. まとめ「居場所」の生成可能性

本研究の「親子の広場」参与観察からは、「A市子育て支援センター」は、「親子が肯定的に受容されていることを感じながら、他者と共感したり、主体性を獲得したりすることを魅力と感じて、自発的に繰り返し通う経験をしようる場所」である「居場所」となっていると考えられた。「居場所」は、誰もが自発的に出入り自由な場として設置されているため多様な親子が来所するが、スタッフが「多様な状況を読み取りながら行われる言葉と身体行為による援助」を行い、来所者の間で生じる交流の違和感が緩和され、お互いに受容的な交流が促されていた。

さらに、スタッフの援助記録の分析からは、記録はスタッフの「多様な状況を読み取りながら行われる言葉と身体行為による援助」と密接

に関係のある記録の書き方となっており、来所者の言動の理由、問題の原因を、個人に求めるのではなく、「居場所」の状況や長期的な関わりにおける文脈の中に求める書き方となっていた。その際には、「居場所」は自発的に通う場であり来所を強制できないからこそ、親子の来所それ自体に肯定的な意味が与えられ、A市子育て支援センターと関わりをもつ親子は肯定的に受け止められることがわかった。

「居場所」は、このように書かれた記録を用いた事例検討会によって、この誰をも肯定するという規範がスタッフ間に共有され、これがスタッフを媒介として来所者間にも共有される過程を通じて生成されていた。このような場は、事例の母親Bのように社会が期待する親像、この場合は“虐待する親像”を自己像と思いこんでいて自己の「内面」を持たないまま、共感を求めて生きている主体性の低い状態にある人にとっての、「他者」像を変換し、「他者」との同一化を可能にして「主体性」を形成し、親子関係を変化させる機能を持ちうることがわかった。

#### 【注】

- (1) 文献6に示すように、「地域子育て支援センター」の利用者の中には、虐待に対するリスク管理的アプローチが進んでいるために、レッテルをはられて疎外感を感じ、主体的に生きることが難しい人がいる。
- (2) 加藤による児童相談所による一時保護を実施する際の判断基準に関する研究や、山田による乳幼児健康診断での児童虐待への対応として有効なあり方を求める研究は、いずれもリスクアセスメント指標による迅速かつ正確な判断と処遇の実施が目指されている。
- (3) 児童相談所は強権と援助という相反する機能を担っているため、家族再統合などにおける援助関係の成立がむずかしいことは近年定説的に指摘される、と竹中は指摘している。
- (4) 保育学研究等の蓄積から、育児不安を抱える親が安定すると、子どもの自立が促されることが明らかにされている。本論文は、その面においては、母子は一体化しているととらえている。

また、父親は、エスノグラフィーの対象としての観察が困難であるため、母親Bの会話の記録内のみ登場している。

- (5) 筆者はボランティアとして参加後、スタッフより研究者としての参加を許された。
- (6) この後、坂下さんが以前より他者と積極的に交流していると事例検討会にて報告された。
- (7) 神奈川県児童医療福祉財団、2005、「子育て支援情報誌no.1」への親の投稿記事より。
- (8) 事例概要は、個人を特定できないよう情報の質を損なわない編集を加えている。日付は全て変更、日にちの間隔のみ維持してある。表4、表5は、個人情報に関しては、空欄としている。
- (9) 例えば、同じ来所者でも「親子の広場」の混雑時と閑散期では態度が異なる場合がある。そのため、表4下線(1)には、“大混雑時”という状況が記述されている。
- (10) その他には「母親Bがネットでともだちを見つけ、家に誘った件」(2件)「Bが他市子育てサークルに通い始めた件」、「母親Bの親戚の関係についての件」(2件)があった。
- (11) 大澤真幸は、「規範の帰属点となる超越性」を分類している。それによれば「他者C」=抑圧身体、「他者D」=集権身体、「他者E」=抽象身体、「他者A」は集権身体の構成の失敗した姿にあたる。但し、大澤の場合には、抽象化の機制も含む概念である。
- (12) 浅野(2001)は日常の場では「自己物語を語りだす権利の正当化が必要」と述べている。
- (13) この時期のメール交換では、スタッフNが忙しくて返信できずとも、母親Bは心理的に支えられていた。つまり、メールの内容は自分自身=「他者E」との対話であった。
- (14) 母親Bは、変化のない環境(貧困による子育ての困難等)も自己原因的にとらえていた。母親Bは近代家族の維持を主体的に引き受けさせられた、と両義的にとらえられる。この両義性こそが従属性という意味も持っている「主体性(subject)」という言葉に込められた意味であるとFoucaultは指摘している。

## 【文献】

- 1) 浅野智彦, 「自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ—」勁草書房, 4-14, (2001)
- 2) Foucault M., 1975, *Surveiller et Punir- Naissance de La Prison*, gallimard. (田村俣訳, 1977, 『監獄の誕生』新潮社, 175.)
- 3) 飯田進, 菅井正彦, 2000, 『子育て支援は親支援—その理念と方法』大揚社, 84-131.
- 4) 加藤純, 2006, 『虐待により児童養護施設に入所した子どもの家庭復帰に関する研究』科学研究費研究成果報告書.
- 5) 加藤耀子, 2001, 『児童虐待リスクアセスメント』中央法規.
- 6) 松永愛子, 2006, 『地域子育て支援センターにおける「居場所」創出の必要性について—現代社会から疎外された人の主体性を育む支援として—』大学院紀要, 日本女子大学, 12:35-44.
- 7) 箕浦康子, 2000, 『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房, 20.
- 8) 日本子ども総合研究所, 2001, 『厚生省子ども虐待対応の手引』有斐閣.
- 9) 大串紀代子, 杉山桂子, 2009, 「子ども家庭支援センターにおける家族支援の事例—親子の遊び広場と個別面接における援助の過程—」, 『ソーシャルワーク研究』, 34(4):335-44.
- 10) 齊藤純一, 2000, 『思想のフロンティア 公共性』岩波書店, 92.
- 11) 竹中哲夫, 2008, 「学会回顧と展望 児童・家庭福祉部門」『社会福祉』, 49(3):204.
- 12) 上野加代子, 野村知二, 2003, 『児童虐待の構築—捕獲される家族』世界思想社, 199-216.
- 13) 山田和子, 2006, 『児童虐待発生に関するリスク要因の探求』科学研究費研究成果報告書.